後期新羅・渤海の統合意識と境域観

<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>著者</td>
<td>古畑 徹</td>
</tr>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>朝鮮史研究会論文集</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>25-54, 308-306</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1988年</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2297/19011">http://hdl.handle.net/2297/19011</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
後期新羅・渤海の統合意識と境界観

一、はじめに

後期新羅の統合意識と境界観

後期新羅における「三大一統」意識の成立

渤海の統合意識と境界観

渤海の「北方東夷」諸氏統合意識

統合意識・境界観の変化の背景

二、前期新羅の北境観

渤海の「北方東夷」諸氏統合意識

統合意識・境界観の変化の背景

三、渤海の統合意識と境界観

渤海の「北方東夷」諸氏統合意識

統合意識・境界観の変化の背景

三、渤海の統合意識と境界観

統合意識・境界観の変化の背景

四、終わり

古畑 徹
民族統一とは見なない北朝鮮の見方と、これを「統一新羅」呼ぶ。これもまた、民族の不完全統一であり、高麗がその不完全性を補ったとする韓国の見方に分かれている。一方、中国では、渤海は現中国を構成する一民族であると見解をとっている。一方、王朝統轄下の一地方封建政治という公的見解のもの、中国東北史や滿族史の中に位置づけ、朝鮮との関係を排除しようとしている。

一九九〇年代の日本の渤海史研究は、どちらの研究に対しても、現代の政治的要因を歴史に反映したものとして批判的である。つまり、韓国・北朝鮮の「帝都国時代」論には南北分断状況の克服という課題が、中国の「唐代の少数民族による地方政権論」には少数民族の国家化の意義を求めるものである。それ故、日本における渤海史研究の問題関心は、関連する実実の投影を見出し、実証研究の成果を踏まえつつこれを解体していこうとしていることとも、密接に関連する。そして研究動向を概括的に捉えるならば、支配方法や支配者の意識に迫る研究が増し、近代以前の渤海を「統一新羅」と呼んでも、既に朝鮮という国家を過去に投影したものではないと見解するだろう。

本稿は、この疑問から出発し、当時の「統一新羅」と渤海の人々がそれを、自らの国家をいかなる世界を受け継ぎ統合した国家と認識していたかを、これを本稿では統合意識と呼ぶ。そこで自らの世界と認識していた大陸を、本稿では渤海と渤海の歴史を、近代国家の枠組みを前提とした「渤海史上の」の文脈から解放し、歴史自体の文脈の中で捉えるための手数をたす。
後期新羅の統合意識と境界観

（一）後期新羅の境界観

まず、後期新羅の境界観を把握するために、その領土拡大過程を概観する必要がある。表1は、「三国史記」をもとにそれを整理した年表である。これから後期新羅の領土拡大過程を概観すると次のようになる。

南領有承認と北進の再開

南流域承認と北進の再開において、後期新羅は八二〇年代まで北に向かって領土を拡大しつつあった。一部は七世紀の新羅に続いているが、その北進は八世紀初頭の「八一九年（大同元年）武成」によって実現されている。さらに、八〇〇年代から八世紀初頭の「八〇〇年代の総制」に至るまで、北進を加速させつつあった。特に八〇〇年代から八世紀初頭の「八〇〇年代の総制」においては、新羅の勢力を増幅させ、北進の加速を実現するための準備を整えていたのである。

このような観点から、後期新羅は八〇〇年代まで北に向かって領土を拡大していった。それでもなお、北進の進展は遅かった。また、八〇〇年代から八世紀初頭の「八〇〇年代の総制」においては、新羅の勢力を増幅させ、北進の加速を実現するための準備を整えていた。さらに、八〇〇年代から八世紀初頭の「八〇〇年代の総制」においては、新羅の勢力を増幅させ、北進の加速を実現するための準備を整えていた。
表1 後期新羅の領域拡大過程年表

平治二年
新羅領土を東に拡大

【六六七】
新羅を首都に設立

【六六八】
百濟を新羅に併合

【六六九】
百濟を新羅に併合

【六七一】
新羅を百済に併合

【六七二】
百済を新羅に併合

【六七三】
新羅を百済に併合

【六七四】
百済を新羅に併合

【六七五】
新羅を百済に併合

【六七六】
百済を新羅に併合

【六七七】
百済を新羅に併合

【六七八】
百済を新羅に併合

【六七九】
百済を新羅に併合

【六八零】
百済を新羅に併合

【六八一】
百済を新羅に併合

【六八二】
百済を新羅に併合

【六八三】
百済を新羅に併合

【六八四】
百済を新羅に併合

【六八五】
百済を新羅に併合

【六八六】
百済を新羅に併合

【六八七】
百済を新羅に併合

【六八八】
百済を新羅に併合

【六八九】
百済を新羅に併合

【六九零】
百済を新羅に併合

【六九一】
百済を新羅に併合

【六九二】
百済を新羅に併合

【六九三】
百済を新羅に併合

【六九四】
百済を新羅に併合

【六九五】
百済を新羅に併合

【六九六】
百済を新羅に併合

【六九七】
百済を新羅に併合

【六九八】
百済を新羅に併合

【六九九】
百済を新羅に併合

【七零零】
百済を新羅に併合

【七零一】
百済を新羅に併合

【七零二】
百済を新羅に併合

【七零三】
百済を新羅に併合

【七零四】
百済を新羅に併合

【七零五】
百済を新羅に併合

【七零六】
百済を新羅に併合

【七零七】
百済を新羅に併合

【七零八】
百済を新羅に併合

【七零九】
百済を新羅に併合

【七零零】
百済を新羅に併合
に李成氏による『新唐書』新羅伝列伝記事の分析によって、八世紀末期以来に長城を異邦人の住む異域とする意識が新羅人に存在していたことが明らかにされており、この長城を新羅人が自己の世界の境界と認識していたことは確実である。ただし、この長城は既に両側の侵略とされる新羅人の居住地をも含むため、新羅人の居住地はこの長城を越えていた。また、この長城は南朝に日本を含む小国に対抗するためのもので、新羅人の世界をそれらの国々から守るために設けられたものである。

一方、新羅人は渤海的第一〇〇代宣大仁秀の新羅進軍に対応すべく渤海へ建設されたとされる新羅人の住む北東地域を経過している。これに対応する渤海の内陸部の悪化を防止するため、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はその北東地域を経過している。これに対応する渤海の内陸部の悪化を防止するため、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。これに加え、渤海の内陸部の悪化を防止するために、新羅人はこの長城を既に設けていたという見解が既に示されている。
後期新羅における「三國一統」意識の成立

後期新羅が高句麗を統合したという意識とは、百済領領が実際に新羅に統合されているから、後期新羅が高句麗・百済の三国を統一したという意識といえる。この意識を本稿では「三

国一統」と呼んでいる。この「三國一統」意識を検討したい。ただし、三

国史記ののような歴史編纂物に現れる人々の意識を検討する場合、編者の意識をそこに書かれた時代の人々の意識を区別する必要がある。そこで作業の処理には、「三國一統」意識から先に確認したい。

三國史記は、書名からも、新羅・高句麗・百済の三国全てを本紀としている点からも、高麗が三国全てを継承したという立場に立っていることは明らかである。そしてこの三国を後期新羅が統一し

観る新羅の歴史観である。観る新羅の歴史観は、親近を求む、委任而不貳、謀定行應、不協謀、合一三主一家、能以功名終焉とする大切な歴史観的立場である。また、編者金富軾の「進三國史記」

に見える「三國一統」という表現も、「三國一統」意識を明示している。三

国は三つに分かれている状態を表現するものだからである。これ

の表現によって、三国は四分の一の体世界とされることがわ

かなるのであり、だからこそ新羅によって「三國一統」は本来の体

のは、一つの本体に一つの足があるため、「三國一統」、三

国史記、三

次に、新羅時代の人々の認識を「三國史記」から見つけただけで

least, the three countries were unified.

The意识 of the later Silla in unifying Goguryeo

was not only to unify the three countries as a single

whole, but also to acknowledge the existence of three
countries as separate entities.

The 'Sangu Geumgi' ('Three Kingdoms History')

in the later Silla period is a historical record

that reflects this unified consciousness. The

record acknowledges the existence of three
countries as separate entities, and the

unification is portrayed as a process

where the three countries were

finally unified by Silla.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.

The term 'San gu Geumgi' refers to

the unified consciousness of the

later Silla, which

acknowledges the existence of

three countries as separate entities.
无法识别的内容。
この新羅国家のメッセージがあるはずであり、それは「三国一統」の国家新羅の表明と解するのである。

しかし、この表明が八六年当時からなされていたとするのはできないうち、地理志は「三国史記」編者が新羅に記された北部日本東西地域の沿海線を示すためのものである。新羅自体が本来の領域と対外的にも表明していた地域である。これにあたる高句麗の領域を含む、わざわざ等配分したとすれば、それは

限り、「三国一統」の存在を証明するのではなく、地理志を参考にして、新羅時代の金文である。管見の

文法として進かず、新羅時代の金文である。管見

のように見えると、「三国史記」から後期新羅における「三国一統」の文法が後期新羅において分かったとしても、それが

のように見えると、「三国史記」から後期新羅における「三国一統」の存在を証明するのではなく、地理志を参考にして、新羅時代の金文である。管見の

文法として進かず、新羅時代の金文である。管見
百済と同じ韓国と見なす観点の同族意識である。

診断をこうした意識を検証し得た背景には、三韓人の融合が進んだことで新羅の人々の間に自身を一つの種族と捉える意識が生まれ、三韓同様の意識が一般化していったと考えられる。新羅による三韓統合という歴史認識は自明の前提だったと考えられる。とすれば、「三韓一統」意識はいつ頃確立したかは、後期新羅が新来の諸種族をどのように統合し融合させていったのかを検討する中で、ある程度明らかにできるのではなかろうか。そこで節を改め、その検討をしてみたい。

（3）後期新羅の三韓統合政策と「三韓一統」意識の成立

後期新羅が百済人・高句麗人をどのように統合・融合させたかを検討する前に、後期新羅が新来の諸種族をどのように統合し融合させていったかを検討する中で、ある程度明らかにできるのではなかろうか。そこで節を改め、その検討をしてみたい。

7世紀に新羅を一つにまとめた表現としては、海東三國や「三韓」が存在したことは、唐の諸史料に散見する。例えば、「新唐書」卷十九上・百済伝に見える永徳二（六五二）年に唐の高宗が百済に出した冊書には、

至如海東三國、開基自久、並列圍界、地實犬牙。近代已來、遂

構嫌誣、戰爭交起、略無寧歲。遂令三韓之氓、命懸刀俎。尋戈

溝深険、"
新羅は元来、王京人に関与する京位とそれ以外に関与する外位の二重官位制をとっており、外位は最高位の巻けでも京位第七等の一吉流にしか該当しないという。王京や地方を明確に差別する体制をとらえないうち、外位の巻けは元々は、新羅に彼らの処遇を考えてこの体制を維持するかどうかという課題を提起した。六七八年に行われた帰属百済官人の官位授与は、王京に彼らの処遇を考えてこの体制を維持するかどうかという課題を提起した。六七八年に行われた帰属百済官人の官位授与は、王京に彼らの処遇を考えてこの体制を維持するかどうかという課題を提起した。
的实际分制の形でその後も継続していったことから明らかである。しかし、王京と地方を峻別する両輪として機能していた二元的官位制という個別の分制を、京位を地方に開放して一元化したことは、佐渡大石大神宮が奈良時代の政治改革に大きな影響を与えたと考えられる。

佐渡大石大神宮の改革は、天智天皇の命令により行われ、その目的は国政の統一と地方の发展を促進することであった。改革は、天智天皇の再生を期し、地方の自治を一層発展させるために行われたものである。

佐渡大石大神宮の改革は、官位制度の改訂に焦点を当てられ、特に地方の連合国を強化するための取り組みがなされた。この改革は、地方の権限を拡大し、地方の自主性を高めたものである。

この改革は、地方の政治的独立を促進し、地方の経済発展を図るための重要な步調を踏むものであった。この改革は、地方の自治を一層発展させるために行われたものである。
させていくことが、新羅が高句麗を単に滅したのではなく、その世界を統合することを意味するからである。新羅は朝鮮半島全般に脅威を抱え未だ高句麗の統合を主張しなかったが、王統という点では高句麗世界の統合が行われたのである。次に六九三年の九誓誓文が成立するも、九誓誓文は四両の百濟人を、表2に示したとおり、八八二年以後、順次整備されていったものである。最初から九になるはずではないが、途中から王軍、九軍といういう中国の理念を背景として、九に揃える方が向で整備されたと考えられる。整備過程で注目すべきは、八七三年、百済と白舘誓帳を作って以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。ここに彼らの服属と密接な関係を読みとることで容易に、百済人で白舘誓帳を作って以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。そこに彼らの服属と密接な関係を読みとることで容易に、百済人で白舘誓帳を作って以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られて以降、新来諸族による誓約が次々と作られた点である。報徳城民による誓約が作られた後の新来諸族の軍団は置かれたことの意味は重要で
ある。つまり、王都という狭い空間に難点の状況が再現され、かれらが新羅王を従うことによって、彼らの統合者としての国王の存在が浮かび上がることになる。新羅国内に居住する新来の鮮卑族を安定期的に統治するためには、新羅が彼らをも包含する統合国家であることを表象的・現実的に表現する必要があると思われる。その機能を有していたのが九掌であったのである。

このように鮮卑族統合の表象として九掌を置いたとき、その新来の鮮卑族を中心に鮮卑人が入っていることは、大変興味深い。なぜなら、鮮卑族は後期新羅において融合の対象とはならなかった、異族化していた他の鮮卑族の登場がこの変化と関係するということは間違いないからである。

本節の考察から、三国統一意識の成立過程は次のように考えられ、鮮卑族が他者との関係の中で生み出されるものとするならば、鮮卑と称される渤海の登場がこの変化と関係することには間違いがない。

三國統一意識では、それが三國の同族意識と成熟するように、三国外の鮮卑人は統合の対象からはずれていた。鮮卑人は後期新羅においても総合的な対象とはならず、異族化していたのである。この間の変化が何によるかは明らかにできないが、民族意識が他の者との関係の中で生み出されるものとするとならば、鮮卑もしくは渤海を称する渤海の登場がこの変化と関係することに間違いがない。
後期新羅・渤海の統合意識と域境観

一、渤海の統合意識と域境観

（一） 海の領域拡大過程と高句麗統治意識

本章では渤海の統合意識と域境観を検討するが、それと密接に関連するのが渤海の高句麗統治意識である。これについて述べる従来の研究は、その存在を指摘し、そこから朝鮮史への渤海の位置づけへとすぐに飛躍してしまうことが多く、この意識自体に分析のメスを欠かしている。本章の検討は、この問題を考慮のところからスタートしたい。そしてそれを考える前に、まず渤海の領域拡大過程を概説しておく必要がある。
示す史料はなく、一〇世紀には弓矢や王建が平壌に進出し、また渤海と対峙していた契丹の耶律阿保機が鴨綠江に一時的に進軍したという記事もある。今ある史料から判断する限り、渤海は高句麗の後を継ぐと位置付けられている。

そこで改めて領国拡大の過程を整理してみると、建国当初の領国は一部の小国を除いてすべてが高句麗の支配下にあり、郡県を統合した統一的な国家が形成されてきた。この時期、渤海は高句麗の影響を受けており、特に高句麗の制度、文化、技術などが渤海に伝播された。

例えば、七〇年代の一部の時期に日本に対して「高麗国王」を称するようになったが、これは単純な高句麗の影響を受けるだけではなく、高句麗の制度、文化、技術などが渤海に伝播されたことを示すものである。

高句麗が崩壊以後、渤海は独自の国家として発展を遂げた。この時期は渤海の独立国家形成の時期とされることもあるが、渤海は高句麗の影響を受けており、特に高句麗の制度、文化、技術などが渤海に伝播された。

このため、渤海は高句麗の影響を受けており、特に高句麗の制度、文化、技術などが渤海に伝播された。
前記の「東夷」の配列は、「扶餘東夷」と「挹婁・度夷」である。一説に、扶餘東夷の下に挹婁・度夷が配列されることがあるが、これは『三国志』の記述と異なるものであると解釈される。しかし、この配列は『三国志』に記載されている通りであり、東夷の構成を示すものである。

古来、東夷は広義で中国の北東部にいた民族を指し、狭義では海東の蛮夷を指すことがあった。しかし、『三国志』においては、東夷は狭義の意味で用いられる。この意味では、東夷は海東の蛮夷を指し、東夷の配列は『三国志』の記述に沿うものである。

『三国志』の東夷伝は、東夷の配列と東夷の居住地を詳細に記述しており、東夷の構成を示すものである。この中で、東夷の配列は『三国志』の記述を踏襲しており、東夷の構成を示すものである。

東夷の配列は、広義の東夷で、東夷の居住地を意味するものである。しかし、『三国志』においては、東夷の配列は狭義の意味で用いられる。この意味では、東夷は海東の蛮夷を指し、東夷の配列は『三国志』の記述に沿うものである。

『三国志』の東夷伝は、東夷の配列と東夷の居住地を詳細に記述しており、東夷の構成を示すものである。この中で、東夷の配列は『三国志』の記述を踏襲しており、東夷の構成を示すものである。

『三国志』の東夷伝は、東夷の配列と東夷の居住地を詳細に記述しており、東夷の構成を示すものである。この中で、東夷の配列は『三国志』の記述を踏襲しており、東夷の構成を示すものである。
一つに過ぎず、国家統合のポイントとは見られていないのである。

十餘年、保據抗戦故地。

かって筆者は、『旧唐書』の伝える「抗戦故地」の原史料は唐側史料で、唐が渤海情勢を集めた比較的早い時期のものであり、一方『五代会要』の「抗戦故地」の史料は、張建章の『渤海国記』にて、「抗戦故地」の認識を示す史料の一つなのである。

一方「抗戦故地」については、『渤海国記』の著者張建章の墓誌（八六七年）が渤海御使者として至ったことを「遼遼州、州都抗戦故地」と記しておる。

『旧唐書』、『渤海国記』の記述は八世紀初の渤海の高句麗継承と地方を示す史料そのものである。しかし、渤海の地方を示す史料そのものが存在しない。
大歴代が北方進出の時代であることは、既に見ました。北方進出自
大歴代が北方進出の時代であることは、既に見ました。北方進出自
また、上京と南都の位置は、現在から見ても北方に位置し、当時の地域全体を見ても北方に偏在している。上京の東面は現在の吉林省敦化市、現在の鏡泊湖に至る山地帯を擁しているのと比べ、上京の北面は、北にさほど山地帯はなく、盆地の南端位置であった。さらに、上京の東面は現在の吉林省敦化市、現在の镜泊湖に至る山地帯を擁しているのと比べ、上京の北面は、北にさほど山地帯はなく、盆地の南端位置であった。関連するようないくつかの事実、この地域の経緯を考えてみよう。
継承関係を重視し、これを国家統合の理念とした。そして旧高句麗領の中で領領を拡大しており、高句麗の旧領域が本來渤海が支配するという境界であるという境界観を持っていたと思われる。これは唐・新羅との領領関係を戦う正当性を少なからずする関係を有したのである。

しかし、進・進による旧高句麗領の回復は当国の国際情勢下で無理であり、拡大の方向は二〇年代から進中心となり、旧高句麗領に支配されたことのない旧高句麗領を吸収していくことになる。そこはまさにこの理念の表現であった。五〇年代前半の上京権府の遷都により旧高句麗領域は広大に拡大したものとなったのである。ただ、旧高句麗領は、旧方東夷一諸族統合意識の中に吸収されていくが、その時期は安定するであろう。このように見てゆくと、大鉄時代渤海国家の質の上の転換期であったという。そして九世紀初には進統一の激縮が国勢を重視する北方に拡大したものとなったのである。

国家統合のための「過度物語」を作るのは、何の近代国家ばかりではない。歴史上の国家の「歴史物語」を作ることが、何より近代国家ばかりではなく、それを指す観点で本稿では、統一新羅と渤海が、その国家が在った代国家の「歴史物語」を相対化する上で意味のある作業と思われる。その結果、各々の完結した「世界」の国家としての「歴史物語」を形していったこと、そして個々の政治課題に沿って「歴史物語」が形成・変質したこと、それに応じたものと思う。さらにそのことによっ

など、南北朝時代物語の特性、性格、立場、歴史観など、それぞれの物語特性が歴史観を描く方法、必要性と有効性が、少しばかり見えてきたのであろうか。
李秀京文 | 五 | 一九八七。邦訳は「対岸諸国における渤海
研究論文集」北陸電力 | 一九九七 | 所収、が北朝鮮の歴史像を
批判して、本文のように歴史像を提唱する。 "一九九五年版の国
定高等学校歴史教科書明石書店 | 一九九七 | を見ると、説明不足
によりわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。

李成市 | 一九八六 | 原著は「渤海史稿」黒竜江
人民出版社 | 一九九六 | はこの歴史像に基づいて書かれている。ま
た邦訳されている朱国鎮、魏國忠『渤海史』(佐伯有満監訳
| 東京書籍 | 一九九六 | を読むと、説明不足
によるわかりにくさはあるが、おおよそその見解に従っている
ように思われる。
後大本土朝中に、平城宮を遷都。平城京を京師とする。これに伴い、百済、高句麗、新羅、日本列島、中国などに影響を与える。<br><br>その後、安和二年（580年）に改元され、新羅の占領を受ける。この時期に日本の文化は急速に発展し、特に文学や文化の発展が著しい。<br><br>その後、天智天皇の時代（596年-604年）に、百済の攻撃を受け、これに対抗するための戦略が講じられる。この時期に新羅を核とした東北アジアの政治的・文化的な組織が形成される。
百済・高句麗三者間の歴史的関係を示したのが、引用した一文である。この一文は簡潔に関係性を明示する効果があるが、三者の関係と国際的背景を理解するためには、さらに詳細な文脈を読み解くことが必要である。この文脈は、特に国際的背景、たとえば高句麗の政治的動向、百済の内政、三者の貿易関係、などが示唆される。

ご注意

引用された文は、一部文法の一部が準拠するため、自然読解にならない箇所が多少あるかもしれません。全般的な文脈を理解するためには、より多くの文脈を読むことが重要です。
『張建章墓誌』に登場する『道里記』は、日本史の重要な資料であり、特に北部靺鞨の支配下にあった渤海国の歴史を詳細に記録している。本書は、渤海国の政治・文化・社会の発展を反映し、同時期の中国との関係を示す重要な文献である。

『張建章墓誌』には、渤海国の地図が描かれています。この地図は、渤海国の地域的範囲を示し、特に北東の地域が重点的に描写されています。渤海国の政治的影響力がこの地域にまで及んでいたことが示唆されています。

日本の学術界では、渤海国の影響を評価しており、特に渤海国の文化が日本に与えた影響についての研究が盛んに行われています。渤海国の文化は、日本文化の発展に大きな影響を与え、特に仏教文化の伝播に寄与しています。

この『張建章墓誌』は、渤海国の歴史を深く理解するための貴重な資料であり、未来の研究者のためにも重要な文献である。
たも、『和田論文』を安史の乱後に渉海が進つ群を放棄したと見ている。

「六六年の渉海使五峰来日の目的を、渉海の新羅征討計画中止を伝えるためと理解する」のは、石井正敏「初期日渉交渉における問題」の政論文に引用している。「この文書は、新羅征討の機会であることを伝えられており、この使者は依然新羅征討の機会を求めるものである。註（53）酒呑論文。」

（54）河内論文であり、『三國史記』巻一〇・新羅本紀・元聖王六年三月詔書・『朝鮮史研究会論文集』一九・九〇一に参考。ただし、ここで新羅征討のイメージは論者によって異なっており、戰争に至るような緊張状態が解けて通常の対峙関係に移ったのか、頻繁な交流による親密な関係に移ったのかは、改めて別に検討する必要がある。

（55）海行家史の史見開展と國際関係に焦点を絞った新羅の重要な長城に、もう一つ、東北の長城と同時期（七〇二年）に対日防禦のために建設された、安東地區南端の安東門をもっての契機がある。これは日本との距離を意味しなが、絶対に守るべき内部の長城（畿内）とその外を分かた国境としての意味を持つ。中国の五服説を起源とする東アジアの天下観を、王か

（56）補足に「新羅小五京の成立と国原小京」上田正昭『古代の日本と渡来的文化』校正者（九九七九）は、この記事を外位廃止と解する通説に疑問を持たれるが、日本を東京地方に定めた現在、その論点は卓越している。本論の論旨は大幅に変更する必要はないものと思われる。
HOW KANEKO FUMIKO AND YOSHINO SAKUZO SAW KOREA: TOWARD AN IMPROVED METHODOLOGY FOR GRASPING MODERN JAPANESE VIEWS OF KOREA

YAMADA Shōji

It has long been pointed out that modern Japanese views of Korea can only be grasped by presenting a complete picture of Japanese thought. There has been no methodological progress toward this goal, however, in fact, we seem to have reached a stalemate. This article was undertaken in search of a more fruitful methodology.

To prevent this from becoming an empty exercise in abstract theoretical speculation, I examine Kaneko Fumiko and Yoshino Sakuzō, seeking to achieve a better grasp of their views of Korea through a close examination of the internal links among each of their respective 1) views of Korea, 2) perceptions of Japan and the world, 3) and ways of life and inseparably linked ways of thought (in the case of Kaneko, the ego and nihilism revealed by her life experiences; in the case of Yoshino, his Christian faith and realism).

VIEWS OF UNIFICATION AND BOUNDARIES IN LATE SILLA AND PARHAE

FURUHATA Tōru

We tend to uncritically project our contemporary views of the states and nation onto the past. This tendency can be seen especially clearly in
the historical images of Parhae prevalent in South and North Korea and in China, and in the tendency to use the term “unified Silla” in reference to Silla from the second half of the seventh century. To overcome such views of history, this article will examine what I call the “unification consciousness”—that is, what territories people saw their states as heirs to and as having unified—and “view of boundaries”—how far people saw their states as extending—of the people of later Silla (in this article I will not use the term “unified Silla” to refer unconditionally to Silla’s unification of the Three Kingdoms) and Parhae.

First, examination of the “unification consciousness” and “view of boundaries” of the people of later Silla reveals the following.

① The Silla state, from the time in the 670s when it displayed the perception at home and abroad of the line between P’aegang and Yŏnghŭng Bay as its northern border until the ninth century, did not fundamentally change its view of that border and saw the area south of that border as its complete territory. This means that later Silla did not see the northern three-quarters of Koguryŏ as part of its territory.

② It cannot be confirmed from seventh and eighth century records that the people of Silla saw their country as having unified the Three Kingdoms (Koguryŏ, Paekche and Silla), but the Kŭmsŏk records show that they did have such a perception by the mid-ninth century at the latest.

③ The origins of the idea that Silla had unified the Three Kingdoms can be seen in the appearance in the seventh century of expressions treating three kingdoms as part of a single region such as “Hedadong samguk” and “Samhan.” The necessary conditions for this consciousness were provided through the implementation in the latter half of the seventh century of policies designed to integrate the various ethnic groups of Konguryŏ and Paekche into Silla. At this stage, however, the Malgals were also an object of these policies of integration, and it was not until they were excluded from these policies, probably when Parhae came to be seen as a major external threat in the eighth century, that unification came to be clearly seen as something involving three kingdoms.

④ From the eighth century on, when the people of Silla came to see themselves as having unified the Three Kingdoms, there was a dissonance
between their territorial view and the state's official view regarding the territory of the former Koguryŏ. It can be argued that this dissonance led to the justification of expansion into former Koguryŏ territory, keeping alive forces that had emerged in later Silla.

Second, examination of the "unification consciousness" and "view of boundaries" of the people of Parhae reveals the following.

① In the first years of Parhae, continuity with Konguryŏ was important in guaranteeing the legitimacy of the state, but from the time Parhae began to move north in the 720s, this continuity began to fade as a source of authority.

② Analysis of references to the Parhae system of local administration in Xint'angshu shows that the Parhae state in the early ninth century sought to maintain its historical authority for state integration through continuity with the Su-chen people, that it had a "unification consciousness" of succeeding to and integrating the world of the so-called northern eastern-barbarians, and that it had a "view of boundaries" that it should incorporate the entire area in which these "barbarians" had been active into its territory. At the same time that this guaranteed the legitimacy of Parhae's northern advance, it also incorporated Parhae's insistence in the early eighth century that it was the successor to Koguryŏ and legitimatized Parhae's claim to Koguryŏ's former territory. Parhae's view of itself in this period as the successor to Koguryŏ must be understood as one in which it succeeded Koguryŏ amid the lineage of the "northern eastern-barbarians."

③ The change from Parhae's view of itself as succeeding Koguryŏ to one in which it was the successor to the "northern eastern-barbarians" took place between the first half of the 750s, when the capital was moved back to Sanggyŏng, and the latter half of the 760s, when strained relations with T'ang, shaken by the An Lu-shan rebellion, and Silla improved amid an international situation that made expansion in any direction other than to the north difficult.